

翻訳はどこから来るのか

～日英対訳文対応付けデータに見る「訳語の力」～

吉川 正人 (慶應義塾大学大学院)

1. はじめに

翻訳は原文解釈の問題で、原文解釈と翻訳に大差は無いと言われることも多い(行方 2003)。とすれば、訳文にいかなる言語表現が用いられるかというのは、原文の意味から一義的に予測できることになる。本稿では、対訳コーパスを用いた分析によりこの予測は成立しないことを示し、その代わりに、「訳語」等の定訳が軸となり、目的言語(以下TL)内の情報を元に訳文が生成されるという仮説を提示する。この仮説に従えば、訳文の言語表現を予測するのは、原文の意味内容ではなく、TL内での「共起情報」である、ということになる。

2. 理論的前提

2.1 研究史的背景

翻訳というものの性質を考えたときに、そのメカニズムとして真っ先に浮かぶのは、所謂「意味の移し変え(meaning transfer)」(Mandelblit 1997; Nida & Taber 1969 等)というプロセスである。これは、簡単に言えば、ある言語Aで書かれた文aの意味を、別の言語Bで書かれた文bに移し変える、ということである。

しかし、あくまでこの想定は理想であって、現実はどうなっているのかというのは経験的に実証される必要のある問題である。これまで、特に心理学や心理言語学において、「翻訳プロセス研究」と呼ぶべき研究が数多くなされてきた(Danks et al. 1997; Kiraly 1995 等)が、どれもこの「意味の移し変え」というプロセスを前提とした研究であった感は否めない。

問題は、「形式的等価理論(formal equivalence theory, Nida 1959)」の否定以来、翻訳が強く「意味の問題」であるとして扱われてきたことにある。意味の処理さえうまく扱えれば、翻訳は説明できる、という発想が円満していたと思えるのである。本稿では、この発想は安易な素朴主義であるとして徹底的に退ける立場を取る。

2.2 何が訳文の形式を決定するのか

確かに、訳文の意味が原文と無関係に突然現れるということはありえないため、「意味の移し変え」モデルにも正しい部分があるのは認めざるを得ない。しかし、その正しさはあくまで「部分的」であって、それだけで翻訳をモデル化し説明することはほぼ不可能であると思われる。

る。いくら翻訳が意味の問題であっても、最終的にそれが「訳文」という「形式」で表される以上、本当に論じるべきは、この「形式」の選択の問題、つまり、「語彙選択の問題」なのである¹。訳文の形式を決定する、形式的源泉は、決して原文の「意味(構造)」ではない。

語(もしくは形態素)という、それ自体で意味を持つ最小の単位には、同時に、それ自体に(所謂選択制限等の)「文法」を持っており、どの語を訳文に採択するかというのは、文構築に根本的で決定的な影響を与える²。このような言語観の元では、翻訳理論というのは、最終的には語等の「意味の塊」を個別に扱えるものでなくてはならなくなる³。

3. 問題提起

ここで、明らかに翻訳を「意味の移し変え」プロセスと捉え、訳文の源泉を原文の意味に求めていると考えられる先行研究を紹介し、その分析を検討した上、問題点を指摘する。

3.1 先行研究

Mandelblit (1997) (以下「先行研究」)は、実験を通じた分析により、

- (1) 訳文で用いられる構文(Constructions, Goldberg 1995)は、原文の構文及びその中心となる動詞の性質から予測できる

としている。この主張は「原文の意味構造が訳文の源泉である」という考えを体現しているものである。ここで言う「意味構造」とは、「使役移動構文(以下CMC)」(Goldberg 1995)という構文であるということ、及びその構文が指示する「使役移動事象」、即ち「『動作主の行動(a)』が、『被動作主のある方向への移動(m)』を『引き起こす(c)』という事態の中で、その中心をなす動詞がa, m, cのどれをコード化しているか、ということである。例えば、

¹ 意外にも、この問題は応用領域である機械翻訳の分野で盛んに議論されている(池原 2004; 野美山 1991 等)。

² このような言語観は、「語彙文法」(Word Grammar, Hudson 1984, 1991, 2007)やその改正・応用版という一面を持つ「Pattern-Matching Analysis」(Kuroda 2000, 2001)^{*)}で体現されている。

³ この意味では形式的等価理論は正しく、再評価が必要であると思われる。

(2) He threw the ball into the basket.

という文は典型的な英語の CMC であるとされる。典型的とは、その中心を成す動詞 throw が「a, m, c 全てをコード化している」(以下このことを「統合的」と呼ぶ)ということである。先行研究は、

(3) 典型的な CMC は、どの言語でもその言語における CMC で翻訳され、その中心を成す動詞は統合的である

としている⁴。

3.2 問題

先行研究の分析の妥当性を確かめるため、*X throw Y into Z* という形式をとる英文を『日英対訳文対応付けデータ』(内山, 高橋 2003)で検索したところ、37 例の対訳対が得られた。しかし興味深いことに、この対訳対を検証した結果、用いられた構文に特に一貫した構造は見受けられなかったのである。さらに、中本他(2006:338-339)による日本語の CMC の定義⁵に従い、選定を行ったところ、CMC は対訳全 37 例中僅か 24 例しか発見できなかった。

ただ、先行研究でも、

(4) その文が指示する事象が「比喩的な使役移動」である場合 (3) は必ずしも妥当しない (Mandelblit 1997: 236-243)

という但し書きをしているため、得られたデータに対し、比喩的か否かの分類を行い傾向を確認した(ここで言う「比喩的」とは、その文が「物理的移動を指示していない」もしくは「物理的移動を指示していても、それが主眼点ではない」ことを表す)。ところが、原文が比喩的か否かの分類では、訳文に現れる構文の形式を予測できなかった。以下の例を見ていただきたい(上段斜体が原文、下段括弧内が訳文。原文の CMC 部分には下線を付した)。

(5) *for ... no group could have survived except on the basis of a sense of solidarity strong enough to throw self-interest into the background.*
(というのは、...いかなる集団も、自己の利害を背景

に投げ捨てるほど強い連帯感の基盤の上でしか、生き残ることができなかった。)

(6) *Finally, if he did not throw the substance into the fire at the moment of leaving the room, who did do so?*
(最後に、仮に彼が暖炉へ問題の物質を放りこまなかったとした場合、それはいったい誰の仕業なんだろう?)

(7) *but the intractable Fogg, as reserved as ever, did not seem at all inclined to throw himself into this lake.*
(しかし、この扱いにくい紳士は、相も変わらず遠慮がちで、自ら湖の中に飛び込むようなそぶりすら見せなかった。)

(5)の原文は比喩的な CMC であるが、訳文は典型的な CMC の形をしている。一方(6)(7)は原文は非比喩的な CMC であるが、訳文は CMC になっていない⁶。

このことから、やはり(3)は妥当ではなく、訳文は原文の意味構造以外の源泉を持つと考えられる。以下、節を変えて詳しく考察を行う。

4. 考察

ここでは、得られた 37 例のデータを検証し、前節で挙げた問題点よりさらに一般的でかつ根本的な問題を指摘する。その上で、その問題を解決する一つの仮説を提案する。

4.1 データ検証

37 例のデータをまず統計的に分析してみる。37 例の内、最頻出 (7 例≒19%)の構文は

(8) (X が/は) Y を Z (の中) に投げ込む

というものであった。この「投げ込む」以外にも、「X は /が Y を Z に V」という構文スキーマを伴って現れた動詞として、

(9) 委ねる、投じる、投げ出す、置く、くべる、捨てる、放り込む

などがあつた。「投げ込む」及び(9)の動詞はみな「統合的」であるということが分かる。そうすると、「投げ込む」と訳されても、(9)の動詞を用いて訳されても、そのいずれでも(3)の一般化には抵触しないことになる。ここに、(3)

⁴ ただしこの一般化にはいくつか条件が付されており、その内の一つは本稿の主張に大きく関与するものである可能性があるが、ひとまず现阶段ではそれはあまり考慮しない。ちなみに条件の一つは(4)である。

⁵ 「形式 P1: “X が Y を Z に V” あるいは P2: “X が Z に Y を V” について、...形式 P1 か P2 が「太郎がおみやげを神棚にあげた」「次郎が親の遺産を隠し口座に隠した」のように)ヲ格名詞 Y によって表わされたもの e[k] が X で表わされた存在 e[j] からの働きかみけによってニ格名詞 Z で表わされた場所 e[j] へ移動するという事態を意味し、なおかつ、その事態が Z による Y の「所有」を含意しない場合に、その形式を使役移動構文と呼ぶ。」

⁶ ただし(6),(7)が CMC でない理由を説明することは可能である。(6)は「Z に」が「Z へ」に変わっているため CMC とは判定されなかったが、この場合のへ格は二格とかなり意味が似ており、その意味で CMC の亜種として認定できなくもない。また、(7)は *X throw Y into Z* の Y が再帰代名詞になっており、その意味で(7)の原文は(自分を投げることはできない、ということから)比喩的な CMC である、ということもできる。しかしいずれにせよ、この説明を可能にするには、先行研究の一般化を少し変更する必要もあるし、検討する課題がかなり増加する可能性があるため、ここでは考慮しない。

の一般化の最大の問題点があると思われる。

4.2 (再) 問題提起

つまり、(3)は、以上の論考から生じる、

- (10) 原文では動詞は単一であるにも関わらず、なぜ訳文では動詞が多様なのか

という疑問を解消してくれないのである。2.2節で述べたように、文構築には語彙レベルの情報が大きく関与している(と、少なくとも本稿では考える)ため、このように、訳文の動詞に多様性が生まれる、即ち、原文の意味構造から一義的に訳文の形式を予測できない、となると、その翻訳モデルは不十分であることになる。そしてそのことは、今回取り上げた先行研究に固有の問題ではなく、「原文の意味」を訳文の唯一の源泉と捉える見方では、ほぼ必然的に生じてしまう問題であると考えられる。

4.3 仮説

そこで本稿では、以下のような仮説を提案する。

- (11) a. 訳文の言語表現を決定しているのは、TL内の共起情報である
b. その共起情報をもたらすのは、訳語等の定訳表現である

この仮説は、(10)を自然に説明できる。

仮に動詞「投げ込む」を用いた(8)が *X throw Y into Z* の典型的な翻訳として設定でき、特に問題がない場合のように訳される、と考えた場合、(9)の動詞が用いられたのは動詞「投げ込む」の使用に「問題があった」からだ、と考えることができる。また、このような2段階の過程を想定しなくても、複数の訳語が同時に候補に上がり、それぞれが競合した結果、より適切な訳語が選定された、と考えても結果は同じである。いずれにせよ、ここでは(8)を「*X throw Y into Z* の最も典型的な翻訳」と仮定し、

- (12) 訳文に(9)の動詞が用いられた場合、それは何らかの理由で典型以外の形が「より適切である」と判断されたためである

と考える。以降、仮説(11)および(12)の想定に基づきデータの分析を行う。

4.4 仮説に基づくデータ分析

以下に、訳文に(9)の動詞が用いられた対訳対を提示する(上段に訳文、下段括弧内に斜体で原文。訳文における(9)の動詞は囲みを、原文におけるCMCには下線を付した)。

- (13) というのは、彼はフェラーラを得たいがために、外

国人の手に自らを委ねたのです。

(for he, wishing to get Ferrara, threw himself entirely into the hands of the foreigner.)

- (14) そして、... アテネ人は(他の共和国と同様)いつも軽いほうの秤皿に身を投じ、均衡を保とうと努めた。
(And ... the ATHENIANS (as well as many other republics) always threw themselves into the lighter scale, and endeavoured to preserve the balance.)
- (15) 椅子に身を投げ出すようにして腰をおろし、両肘をついて、組んだ手の上に顎をのせる⁷。
(then he threw himself into a chair, propping his elbows on the table and resting his chin on his locked hands.)
- (16) ホームズは私の膝の上に手綱を置いて、馬車から飛び降りた。
(Holmes threw the reins into my lap and sprang down from the cart.)
- (17) するとそのうちの一人が、乾いた笑いをうかべ、残ったものを火の中にくべた。
(and one of them, with an empty laugh, threw what was left into the fire.)
- (18) イングランドに着く頃には、フォッグが札束を海に捨てなくたって、すでに7000ポンド以上のお金を使ってしまってるからなあ。
(When they reached England, even if Mr. Fogg did not throw some handfuls of bank-bills into the sea, more than seven thousand pounds would have been spent!)
- (19) ホームズは、届いていた電報を一目見ると暖炉の中に放りこんだ。
(He glanced at a telegram which awaited him and threw it into the grate.)

(13)に関しては(*into*) *the hands (of the foreigner)*の訳語として「(外国人の)手(に)」という表現が選ばれ(、そしておそらく *himself* の訳語として「自ら」が選ばれた結果、これと強く共起する「委ねる」が動詞として選択されたと考えられる。実際、

- (20) *(外国人の)手に自らを投げ込む⁸

という表現は容認不可であると思われる。

(14)・(15)に関しては、それぞれ *himself*, *themselves* という再帰代名詞の訳語に「身(を)」という表現が選ばれた結果、これと強く共起する「投じる」「投げ出す」という訳語が選定されたと考えられる。(14)・(15)においても、

- (21) *秤皿に身を投げ込む
(22) ?*椅子に身を投げ込む

といった表現はほぼ容認不可であると思われる。

⁷ この場合「投げ出すようにして(腰を)おろし」までが動詞部分であると考えの方が自然かもしれない。

⁸ 以降も登場する例文の容認性判断は、筆者の直感に基づくものである。

(16)に関しては, (*into my lap*) の訳として「私の膝の上(に)」という表現が選ばれた結果, これと強く共起する「置く」という動詞が訳語として選定されたと考えられる. この場合も,

(23) *私の膝の上に投げ込む

というのは容認不可であると思われる.

(17)に関しては, (*into the fire*) の訳として「火(の中に)」という表現が選ばれたため, それと強く共起する「くべる」という動詞が訳語に選定されたと考えられる. ただしこの場合は「投げ込む」を用いても容認性に関しては問題は無いと思われる.

(18)・(19)に関しては事情はやや複雑だと思われる. というのも, 単文単位で考えれば「投げ込む」でも全く問題はなく, また, 動詞「捨てる」「放り込む」を用いる積極的な理由が見あたらない, 即ち, この両語と強く共起するような表現が周囲に見当たらないためである. そのためこれはかなりの程度推測になってしまうが, おそらくこの場合は, 「投げ込む」という動詞の「中立性」がこの場面にそぐわなかったため, やや否定的な「意図」を感じさせる「捨てる」「放り込む」という動詞が選定されたのだ, と考えられる(柴田(2006:85)に, 動詞の「意図性」に言及した類似の論考が見られる).

5. 結語と課題

以上の論考から, 「訳語」等の定訳表現を軸とし, TL内の共起情報を元に訳文が構成される, とする, 新たな翻訳モデルを提案する. この考えは, 依存文法や語彙文法(Hudson 1984, 1991, 2007; Kuroda 2000, 2001)の持つ言語観と合致するだけでなく, 機械翻訳でも一部注目されている(野美山 1991 等) ことなどから, 妥当な言語観を体現しており, 応用の可能性も広いものであると言える.

課題としては, 今回要となる「共起情報」に関して, 何も数値的な根拠を示せなかったことが挙げられる. 今後は, 日本語コーパスの定量的な分析を通じて, ある語に対する複数の語の共起率を計算し, どちらの語が用いられる方が(ある環境下においては)より自然であるか, 数値で提示できるようにしていきたい.

また, 「翻訳プロセス」を提示するには, その「結果」である対訳データを見ているだけではやはり限界があるため, 何らかの形で心理実験を行い, 翻訳の「過程」の解明を目指したい.

参考文献

Danks, Joseph H., Shreve, Gregory M., Fountain, Stephen B., & McBeath, Michael K. (eds.) 1997. *Cognitive Processes in Translation and Interpreting*. Thousand Oaks, Calif.: Sage

Publications

- Fauconnier, Gilles., & Turner, Mark. 1996. Blending as a Central Process of Grammar. In Goldberg, Adele. (ed.) *Conceptual Structure, Discourse, and Language* (pp. 113-130) Stanford: CSLI
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: Chicago U. P.
- Hudson, Richard. 1984. *Word Grammar*. Oxford; New York: B. Blackwell
- . 1991. *English Word Grammar*. Oxford; Cambridge, Mass.: B. Blackwell
- . 2007. *Language Networks: The new word grammar*. Oxford: Oxford U. P.
- 池原悟. 2004. 機械翻訳. 長尾真他. 『言語情報処理』(pp. 95-148)東京: 岩波書店
- Kiraly, Donald C. 1995. *Pathways to Translation: Pedagogy and process*. Kent, Ohio: Kent State U. P.
- Kuroda, Kow. 2000. *Foundations of Pattern Matching Analysis: A new method proposed for the cognitively realistic description of natural language syntax*. Unpublished Ph.D dissertation, University of Kyoto
- . 2001. Presenting the PATTERN MATCHING ANALYSIS: A framework proposed for the realistic description of natural language syntax. *Journal of English Linguistic Society*. 17, 71-80.
- Mandelblit, Nili. 1997. *Grammatical Blending: Creative and schematic aspects in sentence processing and translation*. Unpublished Ph.D dissertation, University of California, San Diego.
- 中本敬子, 李在鎬, 黒田航. 2006. 日本語の語順選好は動詞の意味に還元できない文レベルの意味と相関する: 心理実験に基づく日本語の構文研究への提案 『認知科学(特集:言語理解)』13(3), 334-352.
- 行方昭夫. 2003. 『英文快読術』東京: 岩波書店
- Nida, Eugene A. 1959. Principles of Translation as Exemplified by Bible Translating. In Brower, Reuben A. (ed.) *On Translation* (pp. 11-31) Cambridge: Harvard U. P.
- Nida, Eugene A., & Taber, Charles R. 1969. *The Theory and Practice of Translation*. Leiden: E.J. Brill
- Nida, Eugene A., & Waard, Jan de. 1986. *From One Language to Another: Functional equivalence in bible translation*. Nashville: Nelson
- 野美山浩. 1991. 目的言語の知識を用いた訳語選択とその学習性 『自然言語処理』86(8), 1-8.
- Rothkegel, Annely. 2000. Transfer of Knowledge in Cross-cultural Discourse. In Lundquist, Lita., & Jarvella, Robert J. (eds.) *Language, Text, and Knowledge* (pp.189-206) Berlin; New York: Mouton de Gruyter
- 柴田元幸. 2006. 『翻訳教室』東京: 新書館
- 内山将夫, 高橋真弓. 2003. 日英対訳文対応付けデータ. 情報通信研究機構自然言語グループ <http://www2.nict.go.jp/x/x161/members/mutiyama/align/index.html>
- Zelinsky-Wibbelt, Comelia. 2003. Integrating Translation Theory and Translation Practice. In Zelinsky-Wibbelt, Comelia (ed.) *Text, Context, Concepts* (pp. 199- 220) Berlin; New York: Mouton de Gruyter

連絡先 吉川正人 machayoshikawa@dream.com